

山田かん全詩集の校正刷を読みながら、私の胸に去来したのは、なつかしさと含羞でした。かんさんの生きてきた姿がありありと浮かび、肉声までもが聞こえてくるようです。「あまりじっと見つめなさんな」と。含羞は、かんさんの声のなから伝わるのでした。

私は、山田かん作品論も、詩人論も書くことができません。文字通りの管見、思い出話を綴ることで責めを果たしたいと思えます。

はじめにお目にかかったのは、一九六五年の秋のことでした。ちいさな詩集を携えて、山田かんさんの仕事場である、長崎県立長崎図書館を訪ねました。山田さんの作品世界しか知らなかった私に、かんさんを紹介したのは、佐世保の俳人、故坂口涯子先生です。坂口涯子先生は、無季前衛俳句作家で、第二次大戦後、佐世保で、井上光晴、伴震太郎達の文学の集まりの先達でした。詳しい経緯は省略しますが、帰属が苦手で、離人症の傾向のある十九歳の私に、「山田かんにだけは会っておきなさい」と紹介状を書いて下さったのでした。

初対面の私は、おずおずとはじめての詩集を差し出しました。「山田先生」と呼びかけると「僕は君の先生ではありません」と返ってきて、「山田様」と言うと、「さんでいいです」

ということ、創るといふことの本質を鋭く説いて下さったかんさん。その頃の私は、また怒られた、おっかない兄貴のような人だな、と感じただけだったので。ではどんな作品がかんさんの心を動かすのだろう、と、蠅螂が斧を振り上げるようにせつせと詩を書いては、図書館に持参したものでした。かんさんに含羞があれば、私には屈折というほどではなくても、「また不用意なこと言って怒られるのはいやだなあ」という思いがあり、刃を交わすような話をするのは、その後ありませんでした。今思うと、あのように真摯に語りかけてくれたのは、詩への、人間へのあつい想いあればこそだったのででしょう。一九九四年に、長崎新聞文化部の阿部成人記者の企画で、かんさんと対談する機会に恵まれました。半日をゆっくり語り合った、今となってはとても貴重な時間でした。

翌年の新春特集版の企画で「ふるさとに生きる」というタイトルで、「生活と表現」「読まれてこそ詩」「時代閉塞の状況」「詩と自然」「文学の効用」「被爆と戦後補償」「原爆と文学・上下」など、心ゆくまで話しあって、時の経つのも忘れるほどでした。仕事という枠があったからこそ、半日でこのような主題を話すことができたような気がします。場所が、公園と、被爆者の店だったことも印象に残っています。

IX 解説  
活字で残っているこの対談から、かんさんの発言を引用したいと思えます。かんさん自身の校閲を経ていますので。そ

とおっしゃいました。これは、私にとつて、とても大事な挿話です。何ごともゆるがせにしない、かんさんの精神のありようが偲ばれます。その後、かんさんをお訪ねしたのは、十数年後でした。唐突に、タッチアンドゴーという言葉が浮かびます。飛行機が着陸し、離陸するように、私はわがままにかんさんをお訪ねしていたのでした。

一九八〇年代には、よくお話を伺う機会がありました。一九八六年の夏、『日の花芯』西日本反核平和詩歌集という選集を抱えて行った私は、山田さんに宿題でも提出するような気持ちでした。山田さんの仕事の積み重ねに比べて、私の作品は社会性に乏しく脆弱だと、ずつと気にかかっていたからです。ところが、かんさんの反応は、意外なものでした。あきらかに失望しておいででした。「かつて地球という星が」という私の詩に目を通してすぐ、批評する気にもなれませんが、とぼそつと一言。息をのみ、気を取り直した私は「何故でしょうか」とお聞きしました。

かんさんは、諄々と論じて下さいました。「これは詩ではありません、行わけしてあるだけで、散文です。第一、反戦反核というくくりで安易に書いてきたのですか。大多数の人が正しいと思う主題に寄りかかって書くのなら、大政翼賛会と一緒に。危険です。」そのあと、実名を挙げて、「あの人たちの作品に感動しますか。もし感動を呼ぶとすれば、事実の重さだけです。」と、断言したので。今思えば、書く

の頃主宰していた「カサブランカ」という詩誌についての発言です。

「僕自身『カサブランカ』を主宰してみて、これが正しいかどうか——。ただ言えることは今必要だ、ということ。これは自信を持って言える。今日の必要性において詩を書いてほしいし、そのことは今日の命をいかに生きるか、ということと重なっていると思いますね。今日の命の中で、言葉がどう紡ぎだされるか、ということですよ。」

原爆と文学については、次のように語っています。

「被爆の問題は、いわゆる世界史的、国際的な犯罪に巻き込まれて文学が存立しうるか、という問題にもかかわってくる。全体的に見ると文学の力の無さを認識せざるを得ない。文学と世界政治は構造が違う。力の及ぶ範囲、力の構造そのものが違っている。アメリカは世界政治の構造の上で原爆を落としたわけですよ。」

文学というものに絞って考えると、信じる以外にないではないか。文学は活字として存在するし、活字として思想が表明されていく。

表明された思想がひとつの力を持つかもしれない。」

「ジョージ・オーエルの近未来小説『一九八四年』は、旧

ソ連を思わせる独裁的管理国家が崩壊する物語の設定なのですが、事実一九九一年にソ連は消滅したし、東欧の体制も崩壊した。だから、やっぱり社会は変わっていく。止まっていない。必ず動いている。変わるといことは希望です。」

この対談は、希望という言葉で締めくくられました。今年の三月、大震災、津波がおこり、原子力発電所が壊れて今なお断絶を許さないひどいことになっています。山田かんに、是非ご意見を伺いたいと思います。ですが、それはもう叶わぬことです。幽明境を異にする、とは、こういうことなのでした。

その後、親しくお話したのは、二〇〇一年頃でしょうか。詩誌「旋律」の方達と、ご自宅にお見舞いにかがったのでした。水無月科子さん、東佐和子さん、野田桂子さん、原田幸子さん達と談笑しておいでの方らかな笑顔の写真をなつかしく眺めています。ご自宅にお邪魔するたびに、控えめな立ち居振る舞いの和子夫人の、存在のおおきさ、深さが心に刻まれました。佳き伴侶がいらしたからこそ、山田さんの仕事も成し遂げられたのだと、しみじみ感じています。お見舞いのつもりでしたが、励まされて帰るのは、私たちなのでした。二〇〇二年十二月、かんさんが「西九州文学」の同人になられて、諫早で忘年会を兼ねた歓迎会が開かれました。その折の、とびきりの笑顔も忘れられません。長い年月を経て、

## 〈まっとうな虚無〉の淵から・山田かん論

田中 俊廣

どう書き出せばいいのだろう。今年(二〇一一年)三月十一日の東日本大震災に伴う福島第一原発事故を、山田かんはどう論評しただろう。長崎での自らの原爆被曝を生涯書き続けた詩人は、この新たな被曝の様相について、きつと鋭い批評を展開したに違いない。

六〇〇頁を超す全詩集の五五〇以上の詩を一篇一篇、ゲラ刷りで辿ってきたが、ずっと原発事故のことが脳裏から離れず、また、生前の詩人の表情や息使いなどがまざまざと甦ってきて、冷静になれない。さらに、ことばから発せられる熱情や生命を賭した批評性に圧倒されて、こちらの発語機能が停滞し、沈黙を強いられてしまいうえである。

それでも、全詩集を通読して、山田かんの支柱のようになすつくと立ち上がってくる一行があった。

虚無であること それがまっとうである場合もあるのです

IX 解説 「暗冥の彼岸にて——福田須磨子への悼詩——」(『アスファルトに仔猫の耳』一九七五年)の中のフレーズである。これは、詩「ひとりごと」やエッセイ集『われなお生きてあり』で、被曝による病と闘いながら、生命と原爆をモチーフに書

はじめて同人誌で一緒したのでした。執筆への情熱の炎は、かんさんの中で絶えることなく、小説にも挑戦しているとお話でした。ですが、その「須臾の旅まに」が活字になる前に旅立たれたかんさん。同じく西九州文学第二十三号に発表された「瀬戸夕暮駅」を読むたびに、すでに他界を見とおしていた人のまなざしに戦慄します。かんさんが旅立ってから八年が経ちました。もうじき、全詩集が刊行されます。あらためて、詩人・山田かんの全貌と向き合えることを、喜びたいと思います。

き続けた福田須磨子を哀悼する作品である。一〇〇行近い長篇であり、福田に語りかけると同時に、互いの立脚点をも確かめながら、深い敬意が込められている。

この「虚無」ということばは、かつて山田が福田からの書簡で指摘された「何となく虚無的な匂いがつきまると」という暗い印象を、逆に「それはあなたでも在った」と投げ返す形で発語されている。さらに詩の中では、「暗い暗い出口もない虚無」「全て破壊された未曾有の淵」の底から、福田は「幾度でも起き上がったことをぼくらは知っている」と述べ、虚無の淵から「生命のいとおしさ」を訴えてきたことを、同行者・盟友のように確認しあい、その業績の永続性を讃えている。

だから、この「虚無」はニヒリスティックで自暴自棄に陥る皮相的表層的なそれではなく、坂口安吾の戦後の評言「墮ちる道を墮ちきるることによって、自分自身を発見し、救はなければならぬ」(『墮落論』一九四六年)のような、絶望の底から立ち上がる「墮ちよ、生きよ」という真のニヒリズムに裏打ちされていると言える。だから、「虚無であること」それがまっとうである場合もあるのです。「まっとうである」という形容が、ここでは重要な意味を有して来る。中途半端ではなく、底の底、淵の淵から再起してこそ、真の生への甦りが可能である。もちろん、淵へ墮ち入ることの心身の痛苦は並大抵ではないのだが。

以上のように、〈まっとうな虚無〉とは、福田への論評で

あると同時に、山田かんが自らをも鼓舞しようとする認識であった。ダイアログ（対話）のようなこの詩の構造が、同胞・同志の精神の紐帯の心象をも醸し出して、優れた追悼詩となっている。

詩業の本格的な出発点は詩集『いのちの火』（一九五四年）である。この詩集は、二十一歳で自死した二歳下の妹・瑠子へのレクイエムである。長崎市上西山町の自宅で二人は被曝した。かんは旧制長崎中学校三年生で十四歳、妹は十二歳であった。母をそれ以前に、父を三年後に亡くした山田かんは、家長としての自覚もあり、この妹を生きたことの同行者のように思っていたようだ。この詩集は、妹の内面の苦悩に気づかず、心に寄り添えなかった自責と愛の深さと喪失感が重層し混交した稀有な鎮魂曲である。宮沢賢治の「永訣の朝」、高村光太郎の『智慧子抄』などすでに純粹無垢にその愛と悲哀を歌い上げた秀作はあるが、『いのちの火』は、原爆と戦後という混沌とした社会状況を背景に負っていて、困苦の時代を懸命に真摯に生きる二人の様相が胸を打つ。妹生前の詩も含まれているが、死後二か月余りで孔版印刷（ガリ版刷り）で刊行するところに、作者の痛切な悲嘆を読み取ることができる。『いのちの火』所収の作品は、以後のどのアンソロジーにも再録されていない。それほど愛しさと死なせてしまった悔恨を、この一冊に込める思いは深かったのだろう。

以上のように、山田かんの詩業は、妹の死を自己の内奥に説的に対照させ、次のようにその映像を鮮明に浮き立たせる。

ぼくの頭蓋の暗みに懸けられた  
スクリーンでは  
人肉がまだ燃えつづけている  
屍体の起伏が砂丘のよう  
果しもなく映る

そして最終聯で、通過できない心象の時空を次のように定着させる。もちろん、落下地点を通過できないとは、当然、空間的場所であるとともに、原爆被曝時からの生きてきた時間でもあり、忘れてはならない記憶の中核でもある。

緑が見えなかつたらう  
ぼくのこころのなかは植物が枯れたのだから  
いつまでも荒涼としている  
熱で乾きあがつたものが冷たく尖る  
原爆落下地帯なのだ  
ぼくは ぼくの地帯のなかを  
通過できそうもない  
そんな地帯を胸一杯みなぎらせて  
毎日 落下の地点を通過していく

## IX 解説

「恢復とは 痛みを記憶しておくこと」というパラドック

取り込むところから出発するのであるが、このことに加え、昭和二十年（一九四五年）八月九日の長崎の、死屍累々の阿鼻叫喚のごとき惨状を視てきたこと、そして自らも被曝し日常に死を潜ませていることが、作品の原点を形成していくことになる。

その中でも象徴的なのは、鴉を多くモチーフにし、とりわけ「死屍の眼球を嘴に啜えて」（「白血の鴉」、『予感される闇』一九八一年）飛ぶイメージが衝撃的である。ただ単に、不吉で禍々しい悪食の鳥として悲惨と不条理性を掻き立てるばかりではなく、この飛鳥でさえも放射能を体内に孕んでいて、「ゆるやかにビル上空に舞う鴉が一羽／眩暈 嘴を逆さにして突っこんでくる」と心を重ねずにはいられない視点に、批評の鋭利と被曝後三十年を生きた不安、恐怖が反映されている。他に「大鴉」（『長崎碇泊所にて』二〇〇二年）にも「眼球を嘴につりさげて／褐色の死の国を飛んでゆく」とあるが、この根源的映像は、当然、原爆がもたらした非人間的残酷さの象徴として、消え去ることなく永年その脳裏に貼り付いていたのであろう。

このいつまでも離れることのない原爆体験を構造的に描出したのが「地点通過」（『記憶の固執』一九六九年、初出一九五五年）である。原爆落下地点を題材にし、「人は生活を恢復する／恢復とは 痛みを記憶しておくこと」と、一般社会の原爆を忘れた日常と被曝した「ぼく」の痛みの記憶とを逆スの中に、「ぼく」の苦渋が滲み出ている。忘れ去ることが心身の健康のためにはいいが、記憶を剥がすことはできないし、また、そうしてはならないとも決意している。「地点通過」は、自らに責め苦を負わせていくことを再認識する一つのマイル・ストーン（里程標）である。

山田かんにとって、この詩作行為は、治癒の不可能な傷を痛みを耐え、さらに抉じ開けて白日の下に晒すことに等しい。持続的に原爆と被曝をモチーフに書き続けることは、この苦痛を自ら引き受けることである（小説の林京子も、短歌の竹山広も同様である）。「地点通過」を収録している詩集のタイトル（『記憶の固執』とは、まさにこの認識を「どこまでも主張して曲げない」（固執）ことにほかならない）。

いくらか詩人と身近に接していて、不思議に思っていたことがある。冷静沈着で奥深い思索の人であるにもかかわらず、酒が入ったりすると、時折、粗暴で無秩序な言動を呈することがあったのは、抱えきれない痛苦を吐き出す天窓・開放区のような時間だったのかもしれない。全詩集を通読して、改めて背負わねばならなかった荷重の苛烈が想起される。

この「地点通過」というマイル・ストーンを、山田かんは常に問い直していたのだろう。二十四年後、再び同じモチーフで「八月」（『予感される闇』一九八一年、初出一九七九年）が書かれる。

冒頭は「夜明けの黒いミルク／ぼくらはそれを晩にのむ」

という、「アウシュビッツの深い傷痕」を抱えて「セーヌ河に身を投じ」たパウル・ツェランの詩句の引用で始まる。第二聯は広島で被曝した原民喜の鉄道自死と、それと対比させるように扇風機や風鈴や「肌あらわな娘」を登場させながら、原爆を忘れ去った明るい日常風景や人々を強調。そして第三聯と最終聯は次のように続く。

明けることなく  
閉ざされたままに終る夜もある  
きれいな街にはミルク色の壁のなか  
透きとおったレストランがある  
ふと他人の街へ遊山にでたいと  
人はしんそこ思わないであろうか

かつたるい街市まちである重い夏である  
いつか高原の行く雲のしたにいて  
遙かに離れた街の九日を

幻影の酔夢のようにして眺めてみたいと――

夜がきて夜明けがきて

黒いミルクを飲むように絶望に冷えこみながら

最終二行は、冒頭二行のパウル・ツェランの詩句と照応させ、「黒いミルク」の暗示を換骨奪胎しながら、語り手の「絶望」の深さを鮮明に浮かび上がらせている。「地点通過」と

もっていなければならず、「異質の領域に向って開けている」(「経験と思想」)、自己を再生させるアクチュアルで生動的なもの指摘している。さらには「経験」が社会性を帯び、純化されて「思想」に到るとも論述している。

山田かんは、自らの被曝「体験」という一事実を退化させず、詩作という営為、つまり自らの傷を抉け開けるように開いて続けることによって、「経験」という新たな次元の「批判的傾動」を獲得していったと言えよう。そして、長崎だけでなく、広島、アウシュヴィッツへと時空を敷衍させることによって「思想」という普遍的奥行きを築き上げていたのである。「地点通過」から「八月」へ。ここにダイアレクティックな精神の軌跡を辿ることができよう。

山田かんの詩業の最盛期は、一九六〇年代後半から一九八〇年代前半の約十年間である。これは『記憶の固執』(一九六九年)、『ナガサキ・腐蝕する暦日の底で』(一九七一年)、『アスファルトに仔猫の耳』(一九七五年)、『予感される闇』(一九八一年)という緊密な期間での詩集刊行が物語っている。それは、六〇年安保、七〇年安保の政治社会の大きな変動期と並行している。激動の状況の中で、思索と詩作への欲動は高まっていったのであろうし、詩集を世に問う熱情や問題意識も充実していたであろうことが詩篇にも窺われる。

## IX 解説

その後、詩集としては『長與ながよ』(二〇〇一年)、『長

の差異はどこにあるのか。一つは、今述べたようにイメージの鮮烈さが際立っていることである。次に、アウシュヴィッツの「傷痕」を引きずったパウル・ツェランと、「夜ガクル夜ガクル／ヒカラビタ眼ニ タダレタ唇ニ」と広島で被曝した原民喜の「水ヲ下サイ」の詩句を引用して、語り手自身の「傷痕」だけではなく、その絶望と痛苦の時空を普遍化、敷衍していること。さらに、「ふと他人の街へ遊山にでたいと／人はしんそこ思わないであろうか」と、あまりの苦しさ、そこから逃れたい願望を仄めかし、自身の弱さを洩らしながら、それでも葛藤の中で、「八月は残酷な月である」(T・s・エリオットの「荒地」の「四月は残酷きわまる月で」を援用)という、長崎(広島)の八月の記憶と「絶望」の「黒いミルク」を抱えて進むしかないと再認識しているところである。ツェランも原民喜もその傷は「癒えず」自死したが、作品の語り手は、二人の苦悩と自死を継承しつつ、「遺言執行人」(鮎川信夫の「死んだ男」の詩句)として書き続けねばならない。自らの「傷痕」も曳きずりながら。

哲学者・森有正は「経験」と「体験」の内実を明確に使い分けている。「経験」は、「ある出会い」が「新しい生活の次元を開き」、「生活の意味自体が変化して行く」ことと規定している。それに対し、「体験」は、「記憶の中にただ刻みつけられ、年月とともに消磨して行くもの」「新しい次元を展々に到らないもの」(一つの『経験』)と区分する。他の論者でも、「経験」は、「より真実な現実把握への批判的傾動を集成である。

この間、歴史的には、一九八九年十一月に東西ドイツを隔てるベルリンの壁が破られ、続いて一九九一年十二月にソビエト連邦が崩壊する。ソ連崩壊後であったと思う。山田かんが、――私は何を信じてこれまで生きてきたんだろう――とふと洩らしたことがあった。表現は正確でないかもしれないが、落胆の感慨であったことは間違いない。もちろん、国家としての現実のソ連や、実体としての共産党に全面的なシンパシーを寄せていたのではないだろう。それでも、どこかに理想や憧憬を抱いていたようである。複雑で微妙な心境の吐露が忘れられない。

そういう中でも、二〇〇篇近い『長崎碇泊所にて』の詩篇で、妹の死、鴉、原爆のモチーフは展開されていく。いくらか日常性へ傾き、柔軟な語法へ変化しながらではあるが。

その中で、「ひばり」は、新たな詩境へと一歩踏み込んでいる。透視の力が深く澄みわたっている。全三十行の詩であるが、冒頭の「庭にきていた一羽のひばりは／去年のひばりであるだろうか」と同類のフレーズが四回繰り返される(最終行にも)。「鳥はまだ空をみあげている／その胴体の小さな奥ふかくを／陽が翳ったり照ったりして／ぼくはとり返しの

接続はありません今のが終列車ですといわれた  
どうしよう帰り道がなくなった

前半部分の引用であるが、旅籠を見つけ、五右衛門風呂に入り、酒も断り「旅籠家庭のおすわけのよう」な夕食をとる。その後で、「半べら」の時刻表を見るが、具体的なようにで訳がわからない表記があるだけである。物語は次のように締めくくられる。

つまり帰りは無い

そこでやつと目覚めてきたのだ

ただごとではない空間を

つかない時間の／裂け目に落ちこんでいる／あるいは／去年のひばりであるだろうか。ひばりを静かに冷徹にまで視つめることよって、心象の喪失感（「時間の／裂け目」）へと深くアプローチを試みている。何と表現しづらいのか。時空のエアーポケットに落ち込む不安と空虚……。最後は「向かいの家の老婆も／このところ姿を見せない／それだから／あれは去年のひばりであるだろうか」で終わる。死や身体の消滅・喪失を連想させるが、それだけではなく、現実を超えた密やかで澄明な哀しさとも呼べるような情感が漂っている。この思索的存在論的アプローチは、原爆や政治社会を問う作品と異なるようであるが、透徹した視点が日常生活や自己の心象の内奥へと向かっているのである。同時に時代社会への眼差しは継続しつつ、常に現在や現実へと探求の錘鉛を降ろしている。

その柔軟な透視の行き着いた地点が、絶筆とも言うべき「瀬戸夕暮駅」（「西九州文学」二〇〇三年七月）である。夢のような現実のような山峡の駅と田舎の旅籠の風景が寂しく哀しい。

人っ子ひとりいないプラットホームで

バレーボールをはじめた駅員に聞くと

せどむぐれですよと言ったから

瀬戸は近いのだ

日暮れも近いのでも一度きくと

夕暮駅」は、生死の混沌の淵へ分け入った、死を目前にした〈白鳥の歌〉であった。モーツァルトが自らの死を予見して作曲した「レクイエム」のように、この詩にも荘厳な響きが底流している。

最後に、評論活動にも少し触れたい。「聖者・招かざる代弁者」（一九七二年）で、本格的には初めて永井隆を批判する。「浦上の聖者」と仰がれ、長崎市最初の名誉市民で、天皇の見舞いや国民表彰も受けた永井を論難することはタブーであった。永井は『長崎の鐘』（一九四九年）で「終戦と浦上潰滅との間に深い関係がありはしないか。世界大戦争という人類の罪悪の償いとして、日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やさるべき潔き蒸として選ばれたのではないでしようか」と述べ、他の箇所でも原爆投下について「大きなみ摂理」「神の恵」「神に感謝」と付加している。これらの言説に対し、山田かんは『原爆』の内質としてある反人類的な原理をおおい隠すべき加担にほかならず、民衆の癒しがたい怨恨をそらし慰撫する、アメリカの政治的発想を補強し支えるデマゴギーであることも否めない」と批判している。永井の言説は、あるいはキリスト教徒の被曝者にとっては、その悲嘆の極みからの宗教的救済やカタルシスとして作用したかもしれない。それでも、社会思想史、歴史社会学の視点からは明らかな誤謬でしかない。国家間の戦争は、多くは政治や経済の摩擦から生起するものだから。

夢、あるいは夢の中の夢、あるいは超現実的世界。いずれにせよ、「帰り道」を見出せない戸惑いと孤独感は深い。来世または中有から現世への切符を失くしたような驚愕とも言えよう。闘病中に死を意識しているという、作者の現実からの推断も可能であるが、それを離れ、いくらかでも生や死と向かい合って日常を送っている者にとっても、陥穽のごとくぼつかりと穴を開けている空無を寓話のように描いていて、その喪失感と悲哀が静かに着実に押し寄せてくる。

妹の死や反戦反原爆を知的構想と鋭い感性のもとに探求してきた山田かんは、その作品を思想にまで高め、ここでさらに哲学的思惟を柔軟に展開する新境地を開いている。「瀬戸

他にも、浦上天主堂の被曝遺構を残そうとする気運から、取り壊すことへ転換していった動向を反駁した「被爆象徴としての旧浦上天主堂」（一九八〇年）も、今だに政治的暗躍が解明されていない課題を先駆的に取り上げている。『長崎原爆・論集』（二〇〇一年）収録の、この二つの論考は、今日においても戦争と社会に関するアクチュアルで根源的な問題意識を喚起させてくれる。

山田かんは、批評精神を詩にも採り入れることによって斬新で生動的なモチーフを展開してきた。詩と批評は車輪の両輪のごとく、または表裏一体のごとく互いに刺激しあつてそれぞれを躍動させてきたのである。

福田須磨子に指摘され、そしてそのことばを福田への追悼詩の中で投げ返した〈まっとうな虚無〉を基盤に、山田かんは自身の傷痕を抉るようにして出発する。その淵の底から一つの個人的な「体験」を普遍的な「経験」の時空へと広げ、現在と未来社会を生きるべき「思想」へと高めていくダイナミズムを、全詩集は改めて私達に提示してくれている。茫漠とした現代、そして福島原発事故という人類の欲望がもたらした新たな被曝の情況に、山田かんの詩業は、鮮烈な楔のように批評の鋭利なことばを打ち込んでくる。

（二〇一一年六月五日記す）

父と妹の「いのちの火」を

長崎から世界へ発信した人

『山田かん全詩集』に寄せて

鈴木 比佐雄

1

山田かんさんの詩や評論には、八月九日長崎原爆を体験したものでなければ分らない、絶望、喪失感、虚脱感、その場所死んでいった被爆者達の無念な思いや、後に原爆症で亡くなった人々の情念が込められている。私は山田かんさんから、詩誌「草土」、「河」、「カサブランカ」が届くと襟を正して拝読しなくてはならないと感じていた。一九九七年に「列島」の同志であった木島始さんが編集した『列島詩人集』で山田かんさんの詩「浦上へ、ロスアラモス、地点通過、鴉、朝鮮が見える、長イ日ノ底カラ声ガ……」などの詩篇を読んだ時は、このような現役詩人がいることに誇りを抱いた。また二〇〇一年三月に刊行された評論集『長崎原爆・論集』が送られてきた時には、山田さんが詩人としてだけでなく、これほど評論を書いた思想家でもある方だと知って敬意を抱いた。そして私は「コールサック」四十号（二〇〇一年八月）で連載していた「戦後詩と内在批評9」で次のように山田かんさんの評論集を受け止めて記した。

〈詩誌「列島」にも参加し、一貫して原爆の痛みを詩に書

の長崎原爆の意味を根源的に問うて、継承していこうとする山田さんたちの思いは裏切られてきたのだ。けれどもそれら長崎という被爆地での複雑な立場の違いや利害関係の格闘をも山田さんは冷静に書き記している。そのことを含め長崎原爆の苦悩を体現する貴重な資料となる本だろう。大量殺戮の恐怖で世界を支配しようとする「核権力」の時間を止めるのは、「被爆体験の継承」を時間化する以外にはあり得ないとする、山田さんたちの粘り強いメッセージは確かにこの本に結実している。〉

以上のように十年前に私は山田かんさんが内側から被爆者の思いを記録している詩人だと紹介した。山田かんさんからもお便りを頂き、私の書いたことを喜んでくれていた。その手紙から山田かんさんはまだまだ健在だと思われた。そして近い将来、山田かんさんに私が構想している新しい『原爆詩集』の相談に乗ってもらおうと心秘かには考えていた。しかしその日が訪れる前に亡くなられたことは本当に残念だった。今回の全詩集の編集中に五五三篇もの詩篇を読んで、目撃した被爆者の悲劇的な存在をリアリズムで描写し、傍らの被爆者の思いに肉薄し、乗り移ったような想像力を駆使して、「被爆体験の継承」を内側から後世に語り継ごうとした傑出した詩人であることを私は再認識した。

## IX 解説

二〇〇三年二月に「草土」二十八号を送って頂いた。その四ヶ月後の六月八日に山田かんさんは亡くなられた。私は二

き続けている山田かんさんが、今年三月に『長崎原爆・論集』（本多企画）を刊行した。一九六九年に出した『詩集・エッセイ集・記憶の固執』以後の散文が収録されているという。この四百五十頁もの大冊を読みながら、私に迫ってきた圧倒的な思いは、「被爆体験の継承」がどんなに想像を絶する大変なことであるか、けれどそれに生涯を捧げた人々が存在し、今もその困難な課題に挑んでいる姿だった。山田さんは十四歳で長崎で被爆した。その原爆に翻弄された人々の生の声や原爆反対運動に関わる人々、その運動を風化させていこうとする勢力など、山田さんは詩作品以外に散文でも記録し続けている。それは内側からの被爆した人間たちの悪戦苦闘や痛切な思いを掘り上げる行為だ。その重たい記憶が山田さんの肉体を通して語られている。

（山田かん「長崎被爆二十五年の視点」の引用は省略）

父が呟いた「だれがこのせんそうをはじめたんだ」という問いが、山田さんの肉体に刻印されたのだろう。山田さんが半世紀以上にもわたり詩と散文を書き続けている原点を問う姿勢が、この大冊に一貫して貫かれている。原爆を体験したことはいったい何なのか、その体験した場所での時間は「幼児の黒こげになった尻」になって固まっているかのような。けれども広島とは違い、長崎では被爆の象徴としての旧浦上天主堂が一九五八年五月に撤去されてしまった。また福田須磨子原爆詩碑を破損するといった、原爆を忘却させたい政治勢力が長崎では広島以上に強く、こ

〇〇一年に『浜田知章全詩集』、二〇〇二年「鳴海英吉全詩集」（二冊とも本多企画）の編集・刊行を終え、「鳴海英吉研究会」を仲間たちと立ち上げた頃だった。また次の詩論集『詩の降り注ぐ場所』をコールサック社から刊行し、本格的な詩書の専門出版社として株式会社化して、新しい『原爆詩集』を刊行したいと考えていた。山田さんの死去の知らせが入り、原爆の直接体験者の詩人が少なくなってきたこともあり、新しい『原爆詩集』を急がねばならないと痛感したのだった。私は一九九七年に浜田知章さんの広島講演旅行に同行し、初めて広島島の街を歩き回った。宮沢賢治の手帖の研究者でもある小倉豊文さんの『絶後の記録』を片手に広島島の街を歩きながら、多くの現役詩人の原爆詩を入れた新しい形の『原爆詩集』を刊行し、浜田知章さんが講演で話された「原爆詩を世界に発信しよう」という考えを具体的に構想したのであった。それから十年後の二〇〇七年八月六日に山田かんさんの詩二篇「ロスアラモス」「地点通過」を収録した『原爆詩集一八一人集』が実現できた。五十紙以上の新聞が紹介記事を書いてくれたことも幸いして初版三〇〇〇冊はひと月で無くなり、二刷りをした。九州から電話があり新聞で読んだので、私の分と孫の二人に読ませたいので三冊を買いたいと言ってくれた朴訥なお婆さんからの電話は、本当に嬉しかった。その年の十二月には英語版も刊行し、核兵器保有国の大使館、アメリカ大統領、元大統領たち、国連本部と日本支社、世界の核兵器廃絶を願う詩人や多くの方の支援を得て世界中

の心ある人びとに届けることができた。『原爆詩一八一人集』を刊行した後に、私はきつとこの『一八一人集』の詩人やその関係者の中から、本格的な個人原爆詩集が出てくるだろうと考えていた。そして二〇〇八年八月九日に中原澄子詩集

2

『長崎を最後にせんば 原爆被災の記憶』や二〇〇九年八月六日に上田由美子詩集『八月の夕風』、二〇一〇年八月六日にデイヴィッド・クリーガー日英語詩集『神の涙——広島・長崎原爆 国境を超えて』などの『原爆詩集』を刊行することができた。そして二〇一一年には、『山田かん全詩集』を刊行し、山田さんの全貌を後世に残すべきだと考え始めるようになった。二〇一〇年一月に広島原爆を記した詩集『幻日記』の著者である大崎二郎さんの九冊の詩集と未収録詩集を集めた『大崎二郎全詩集』が刊行された。私は「列島」の仲間だった浜田知章さん、鳴海英吉さん、そして浜田さんと詩誌「山河」を出していた大崎二郎さんに匹敵する全詩集を編集発行させて欲しいと、奥様の山田和子さんにお電話をして全詩集の出版の正式な申し出をした。奥様は息子さんたち、かんさんの親友や関係者に相談をして出版の話をまとめて下さり、この全詩集が動き出し刊行にこぎつけることが可能になった。私の中で浜田知章さんがいち早く構想された、核兵器の悲劇を発信し、原爆を廃棄させることを願う「原爆詩運動」の歴史の中で、最も重要な詩人として山田かんさんは論じられなければならないと考えている。そのためには山田かんさんが発表を意志した詩集の詩篇、詩誌など

に発表した全てをそっくり、原爆体験を継承することを試みている人びとや後世の研究者に残すべきだと考えたのだ。

山田かんさんは、一九四五年八月九日に「学徒動員による軍需工場の三交替の徹夜作業を終えて西山町の自宅に帰り、ひと眠りより醒めた頃合に被爆した」（長崎・戦後基点の虚妄）。その翌日に「浦上を脱け死屍累累の原野を線路づたいに西彼杵郡子々川郷まで逃げ」たという。西山町は長崎駅に近く爆心地から約二・七km前後のところだ。その自宅も破壊されたのだろうか。その翌日には、浦上川に沿って走っていた線路づたいを歩いて子々川郷まで逃げたということは、爆心地や浦上天主堂の廃墟を右手に見ながら、恐るべき光景の真つ只中を踏み越えていかなければ不可能だったろう。広島ウラン型原爆ではなく、プルトニウム型原爆がもたらしたこの世の終わりの光景が、十四歳の山田さんの精神と肉体には刻印されてしまったに違いない。

山田かんさんの各詩集の詩篇の特長を論じてみたい。第一詩集『いのちの火』は一九五四年に刊行された四行の言葉と四十二篇から成り立っている。この詩集は私家版の手描き文字でガリ版印刷である。全篇が自殺した妹の琇子さんを追悼する詩篇群である。四行の言葉は、「銜いもなく気取りもなく遺書もなく／小さい宇宙の中にギリギリと追い／つめられねばならなかった妹／此の詩集を愛する琇子の霊位に捧ぐ」

というように、死んでしまった妹の魂との対話を詩で試みたものだ。その詩篇の中でも「幻惑」、「原爆」、「訣別」が特に心に残り、紹介したい。

原爆

幻惑

壊滅の瞬間より／八年／あの日君は／恐ろしい程／腰がすわった／閃光と爆音の波の中／食糧を思い／私を助け／洞窟へ——／君は耐えた

足は一人／己れの／幻惑された／悩みを抱いて／オロオロと／彷徨いあるく／馬鹿な兄を／許してくれ／君が死ぬ程の悲しみも／君が死ぬ程の淋しさも／だが——／悲しみも／淋しさも／それは／何処から／くるものだろう

一九五四、一、二四

この詩には、兄である自分は悩みを抱いていたが、死ぬ程の思いで悩んでいた妹に比べたら、たいした悩みではなく、悩みという意識に幻惑されていたようなものだという兄の痛切な思いは記されている。そんな「馬鹿な兄を／許して欲しい」と悔み続けている詩篇だ。しかし最終連に悲しみや淋しさの根源を問おうとする、自分を越えた何かを探求して行くとしている。その意味では妹への鎮魂詩でありながら、妹を通して、被爆後に懸命に生きた一人の若者が、命をすり減らしながら賢明に生きた足跡を記し、ある種の存在論的な問いや実存的な問いを発していた詩集だと思われる。

この詩は妹がまだ生きている時の詩で亡くなる数年前に書かれたものだが、山田かんさんは原爆直後の妹の行動力に敬意を払っていたことが分かる。大の男の父が泣き崩れている時に、十二歳の妹は毅然として食料の心配をし、家族を勇気づけた存在だったことが分かる。妹の頑張りによって家族は励まされ救われた時もあったが、妹は戦後の青春期に仕事・恋愛・家族との様々な問題に直面し苦悩し、生きるエネルギーを喪失していったらしい。そんな不幸な妹の魂に語りかけることよって、最愛の妹を二十一歳で自殺させてしまった戦後の過酷な時代の問題点を生涯にわたって背負って、詩作を継続しようと考えたのかも知れない。自分よりも敬虔なクリスチャンであった妹が、どうして禁じられている自殺をってしまったのか。そんな人間存在の不可解さを抱えこんで山田かんさんは、生涯にわたって妹の魂や終戦後にも亡くなっていった多くの魂を鎮魂し続けたのだろう。

訣別

冷めたい風が吹いてゆく／冬に逝き／歳々訪れる冬にも／  
帰って来ることのない／琇子／冷たい風が／しんから／冷  
たく感じる／今年の冬を／辛いとおもう／雪が降ってい  
る／見るものすべて／生くるものすべてが／死んで  
いった君を／蘇らせるばかり／冷たい風が／硝子戸を／こ  
とさらに鳴らす時／帰って来はしない／激しい／淋しさに  
襲われる／南国に雪は舞う／暗い路地路地を雪が／冷た  
く濡らしている／生涯かけて忘れない／琇子／辛いけれ  
ど——／春は動きはじめている／さようなら／再び私らは  
出発させねばならぬ

一九五四、一、二五

私はこの詩を読み、山田さんが抱えている壮絶な心象風景  
の原点を垣間見たように感じた。山田さんは南国にも雪が降  
り、路地裏を淋しくさせるものを見ると妹を想起するのだろ  
う。この世の悲しいもの、淋しいものを感じさせる時に、死  
んでいった妹のような存在を「生涯かけて忘れない」と誓っ  
ている。自殺する存在は認めてはならないが、自殺するほど  
悲しく、淋しい存在を忘れないで共に生き、生き直そうとし  
ているように感じられる。訣別とは、自殺した妹と訣別して  
しまったが、妹から原爆投下後に与えられた「いのちの火」  
をもう一度甦らせねばならないという決意であったかも知れ  
ない。十四歳の兄と十二歳の妹は、爆心地を横切り、この世  
の地獄を通り抜け、励ましあいながら緑のある町へと向って

はぼくらの想い／そしてぼくらの思いの窓々／室内に立つ  
洋服のマネキンは／かならず ぼく達／記憶の死滅／あ  
るいは 魂の肉体からの／剝離を／瞬間 文明はとらえて  
いいものか／犠牲者たちの 恐怖 憎悪／語ることでき  
なかつた／かすかすの永くつづく言葉を／こんぐらがつて  
呻きつづけている／巨大な一塊の言葉を／激しく語られる  
べき言葉に／ぼくらはいまも／どんな編成をなすことがで  
きたのだ／瞬間——／これは恐ろしいことだ／瞬間！／  
これももっている不可視の意味／瞬間！／これを語るべき  
人々の／永遠に閉じこめられている言葉／六日と九日の／  
数十万の死者たち／語られなかつた言葉を／瞬間を覗き  
みしたい実験者のうえに／鉄管も ガラスも／石膏のマネ  
キンも／そして／六日 九日の人々よ／いまや怨霊となっ  
て生きはじめよ

山田かんさんは、米軍が国家予算を超える税金を使いマン  
ハッタン計画の成果を誇示するために、広島と長崎で核兵器  
を使って人体実験をしたことが明らかににもかかわらず、日本  
政府や多くの日本人がその「瞬間」から目を背けて、いつに  
なっても抗議しないことに激しい憤りを感じている。数十万  
人の民間人をモルモット代わりにした戦争を指導した人間た  
ちとは、何者であるかを鋭く問うている。長崎は、広島と異  
なりクリスチャンの街なので、直接的な告発をしないと一部  
で人びとから言われてきたが、山田かんさんの場合は、それ

進んでいったのだ。そこから生き残った父や妹そして弟も亡  
くなり、三人から手渡された「いのちの火」を胸に秘めて山  
田かんという詩人が誕生した、と私には感じられた。

3

第一詩集から十五年が過ぎて第二詩集『記憶の固執』が一  
九六九年に刊行された。この四十四篇は、仮に原爆詩史を作  
るならば、これ程、被爆者の思いを胸中に込み込ませながら  
も、加害者がどんなに冷酷で取り返しのつかないことをした  
かを突き付けている。そんな詩篇をこれだけ書いた『原爆詩  
集』はかつてなかつたと記されるだろう。その中でも私は「ぼ  
くらのことが玩具にされている」という痛切な詩行を記した  
「狂暴な玩具」を読むと山田さんがいかに被爆者の記憶を忘  
れ去ろうとする人びとへ、怒りを抱いているかが痛感される。

### 狂暴な玩具

手工で持ちかえった／ボール製の家を／足で踏みつぶすよ  
うに／燐寸をするように／無防備都市にみたてた本物が／  
実験されている／ぼくらのことが玩具にされている／彼等  
の玩具で／背後の暗さを／際だつた輪郭だけに教えて  
いる／映画館／チカチカ流れるスクリーンに／見も知らぬ  
ユツカ平原が揺がる／白ペンキの住宅がつづく／発電所  
放送局 水道 ガスタンク／住宅はぼくらの思い／発電所

は当てはまらない。なぜなら山田さんは、米国と日本政府の  
もたれあいの関係が、核兵器の恐ろしさを隠蔽してきたかを  
見抜いていたからだ。長崎では被爆後に永井隆という長崎医  
大の教授であり、クリスチャンである歌人が『花咲く丘』・『長  
崎の鐘』などを書き、長崎被爆を神からの試練であるように  
宗教者である被爆者の複雑な内面を語った。それに対し山田  
かんさんは米国・日本政府・天皇制の戦争責任を問うていく  
姿勢を持つとうしなかつたことに、評論「絶後から再び」・「聖  
者・招かざる代弁者」などで、宗教者永井隆の問題点を分析  
し指摘している。そして数十万都市への原爆投下の戦争責任  
を明らかにしていく努力は、宗教上の問題だけでなく、自ら  
の課題でもあり、「長崎が被爆で負った重大な世界的意味」も、  
「被爆二世」の倫理的で人類的な観点からも重要な課題とし  
てなされなければならないと論じている。このように山田さんの  
詩と詩論は一致しており、決してぶれることのない誰もと言  
えなかつたことを被爆者の視点であり、人類的な観点で語る  
うとした類例のない詩人だったのだと私は高く評価している。  
第三詩集『ナガサキ・腐食する暦日の底で』では、「作品Ⅰ」  
の十五篇は第二詩集からの再録である。「作品Ⅱ」の二十七  
篇は第二詩集に収録されなかつたものや、詩「耳」でベトナム  
戦争のことや、詩「朝鮮が見える」で朝鮮半島との交流こ  
となどで、国境を越えた民衆の苦悩や喜びを描こうと試みて  
いる。また詩「闇から発し闇はめぐる」などの米国が広島・  
長崎に原爆を投下した行為をリアリズムで描こうとしている。

しかし山田さんは長崎原爆に関わった三機の爆撃機などの飛行機の中に、チャーチルの連絡官であるチェシャー大佐がおり、生体実験の視察に立ち会っていたことから想像力を膨らませていき、国際政治の非情さを抉り出している。

一九七五年に刊行された第四詩集『アスファルトに仔猫の耳』には一九篇の詩が収録されている。この詩集の編集の仕方でも山田さんの特長がよく現れている。Ⅲ章に分かれていて、I「伝説から未来へ」十五篇は、一九五二―一九五五年の詩篇、II「鯨と馬」三十六篇は、一九五六―一九六五年の詩篇、Ⅲ「アスファルトに仔猫の耳」六十八篇は、一九六六―一九七四年の詩篇から成り立っている。第三詩集でもそうだが、過去に書いた詩篇で詩集に入れていなかった詩篇を時系列で入れて、比較的最近のものを後に配置するという時系列の方法を取っている。山田さんは、いつもこの詩集が最後の詩集になるといった思いで詩集をまとめられて来たのかもしれない。自分の生きる時間の有限性を知っているからこそ、瞬間瞬間を大切に、自分に課せられた詩作や評論活動をされてきたのだろう。その中でも一九七一年八月に書かれた「墓地にて」を引用したい。亡くなっている父、生母、妹、弟を偲んでいる詩だが、山田さんが詩を書き戦後を生き抜いてきた存在理由が心に沁みってくるような詩篇だと感じられる。その詩を引用したい。

#### 墓地にて

おとうさん おれがあなたの希むところに／そえなくて済まないとおもいます／だが おれは詩を生命のように／燃やしていったかったんだ／昭和二十三年七月 四十七才で逝った／あなたにはおれの苦しみがわからない／だがおれは庭に咲いた白菊一輪／こうしてあなたに捧げます／おかあさん おれはあなたの／道という名が好ましい／おれが書く詩のなかで道があれば／すなわちそれはあなただ／昭和十一年八月 三十二才で逝った／あなたにはおれの悲しみはわかってない／だがおれは庭に咲いた白菊一輪／こうしてあなたに捧げます／いもうとよ おれがきみの嘆きに／触れきらぬまま／きみのこころと不図とぎれたことを――／うちつづくこの疼きはなにか／昭和二十九年一月 二十一才で逝った／きみはおれを無縁のものと思っていよう／だがおれは庭に咲いた白菊一輪／こうしてきみに捧げます／おとうとよ おれはおまえの／顔がもうおぼろにしか泛べられぬ／おまえの薄いドラ焼き一枚／くすねた飢餓に心底いまでもなけてくる／昭和二十二年四月疎開地 六才で逝った／おまえの惨めな時代はおれなのだ／だがおれは庭に咲いた白菊一輪／こうしておまえに捧げます／花は今年最後に咲いたもの／凍ばれる冷気のなかに咲いていた／おれの庭を見てください／あなたら とおい死者たちよ／そのごどうしておれが生きてきたか／この小さな庭

がその証しとは思わぬが／土に芽生える愛憐を／せめてあなただちに供えるために

(一九七二・八)

その後山田さんは、一九八一年に第五詩集『予感される闇』(六十六篇)では、詩「白馬の天皇」や「天皇の言葉」で天皇の無責任であまりに軽い言葉をあえて検証していった。第六詩集『長與ながよ』(詩二十六篇、エッセイ八篇)では、子育てした場所でもあり二十年ほど暮らした長與を慈しむ眼差しで書き記した。第七詩集『長崎碇泊所にて』(一八五篇)は、関わった三詩誌のごとの「草土」期篇(一九八一―一九九一年)、「河」期篇(一九九二―二〇〇〇年)、「カサブランカ」期篇(一九九三―一九九七年)、『詩誌・雑誌』篇(一九八〇―二〇〇二年)というようにIV章に分けている。これらの詩集に収録され重複を除いた五〇九篇以外に、未収録の四四篇を合わせた五五三篇を通読することによって、長崎原爆の実相が立ち上がり、こんな状況にも決して屈しなかつた精神の金字塔を知ることができるだろう。この全詩集が広島・長崎に関心ある多くの人びとの心に染み渡っていくことを願っている。

IX 解説 山田かんさんは研究書『古川賢一郎 澁江周堂と戦争』を晩年書き上げた。二人の長崎の現代詩の先駆者であった貴重な業績を書き残した。そんな山田かんさんのような詩人・研究者が長崎・九州から現れて、原爆・原発に翻弄された二十

世紀・二十一世紀の世界史の中で、広島・長崎原爆のことを徹底的に思索するために、いつの日にか『山田かん全詩集』を熟読し、原爆下の人びとの真実の思いを知り、私たちが知らない未知の『山田かん論』が書かれる日を私は夢想している。最後にこの数日、新聞のトップ記事にもなっている佐賀・玄海原発をめぐる「やらせメール」は、九州電力の元副社長が指示をした、プルサーマルや原発増設などの世論を誘導する反民主的であり法令違反の行為だった。同じようなことが鹿児島県の川内原発でも行われてきた。山田かんさんが健在だったら、どんなにか九電の行為を糾弾しただろうか。そして九電の幹部たちは原爆と原発が全く異なるものと考えているが、実は双子の兄弟であり、九州の原発はいつでも福島原発のように冷却装置が破壊されて、「消えない火」である爆心地になり、数多の人びとや地域全体が放射能に侵されていく可能性があり、それゆえ原発を廃炉にすべきだという山田かんさんの声が私には聴こえてくる。核兵器や原発が人間の尊厳ばかりか遺伝子レベルまで破壊する恐ろしさは、詩「十五歳」などを読めば明らかだ。被爆者の少女が後に結婚し産んだ子供は、「再生不良性貧血 ジン原発性リンパ肉腫」などで死んでいった。そんな悲劇を二度と繰り返してはならないと山田かんさんは語っていると思えてならない。「被爆体験の継承」を願う方たちはもちろんだが、現在、原発事故の様々な問題を抱えている多くの人びとにも読んでもらいたいと願っている。